



企画にあたって

奥村貴裕 (名古屋大学大学院医学系研究科先進循環器治療学寄附講座 特任准教授)

2025年3月に改訂された「2025年改訂版心不全診療ガイドライン」から10カ月。現場では、「それはわかっているけれど、この患者さんに本当に当てはまるのか？」という迷いが、むしろ深まっているのではないのでしょうか。超高齢、フレイル、腎機能の余力は乏しく、薬はすでに10種類…という日本の心不全医療に、欧米のエビデンスを100%の濃度で流し込むことは容易ではありません。Class I と書いてあっても、目の前の患者さんにそのまま入れられない、その“ためらい”こそが、現場のリアルで、クリニカルシーズだと思います。

本特集は、そのためらいに対する「羅針盤」を目指しました。あえて断定的な正解ではなく、判断が分かれる Class II a・II b の推奨やグレーゾーンのテーマを正面から取り上げ、「で、結局どうする？」という問いに一緒に向き合います。ガイドライン推奨文の「どの患者に」「どの目的で」を正しく読み解き、その条件からはみ出したときに、どこまで攻めてよいのか、どこで引くべきか。その行間の読み方を、具体的に示していきます。

「識る」「診る」「治す」を通じて、リスク因子管理と早期診断、画像・遺伝子検査の使いどころ、リスクスコアの限界、サルコペニアや栄養管理、QI、心房心筋症、HFpEF 治療やデバイス適応、worsening heart failure の察知、退院後の繋ぎ方、VAD・移植、そして「GDMT がわかっているけど導入できない理由」まで、今、現場が本当に困っているところに斬り込みます。

執筆は、ガイドライン作成に携わったメンバーを主軸に、すでに第一線で患者さんを支えながら次世代の臨床トレンドをつくっている若手エキスパートにお願いしました。迷える子羊の群れの中で一番先に一步を踏み出している臨床医の、等身大の知恵を集めました。日々の臨床判断に迷ったとき、そっと開ける1冊になれば幸いです。